

土佐和紙を中心に伝統を究めた技での表具の作製と それらの現代建築への展開・適用

上 田 博 康 殿

高知地方では、土佐和紙を始めとする各種の伝統的技法による和紙が、透光性、触感、色、風合い等に独特の個性をもち、強度・耐久性にも優れた素材として、長い間、襖・障子等の建具を始め、内装仕上げ等にも幅広く使われて建築空間を演出し、土佐漆喰とともに、高温多湿で雨風の厳しい高知の気候に適した建築づくりに欠かせない役割を果たしてきた。

上田博康氏は、生地高知で 60 余年の長きにわたって表具店を営み、伝統製法にこだわった土佐和紙や手漉きの未晒し和紙、柿渋塗りの渋紙等を活かした襖、障子、屏風、衝立等、和紙を使う建具の伝統技法を守ってこられるとともに、これらの伝統的和紙による壁・天井等の内装仕上げなどの技法の活用・発展に努めてこられた。そして、高知城上段の間、国分寺金堂（いずれも国指定重要文化財）等をはじめとする文化財建造物保存にあたって内装・建具の復原に大きな役割を果たしてこられたばかりでなく、高知県の現代建築の制作においても、高知県立美術館、いの町紙の博物館等の公共建築をはじめ、多数の住宅作品などの建具・内装において、地域に愛される表現の可能性を拡げるうえで多大な貢献をされてきた。高知県は、元々、楮等の和紙の材料やその製造工程で必要となる良質な石灰・水に恵まれた全国有数の和紙生産地である。同氏は、こうした活動を通じて伝統的和紙の魅力を広め、若い世代に伝統的和紙の技法を継承して、その発展に寄与されていることも特筆に値する。

地域の文化・伝統を踏まえた建築の可能性の追求は、日本全国、世界各地において、現代建築・まちづくりの大きな課題である。同氏の直接の業績は、ほぼ高知地方に限られるものではあるが、全国各地での地域文化の取り組みに対して、大いに励みとなるものであろう。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。